

91 本木良意識『阿蘭陀経路筋脈臟腑図解』をめぐる考察

成瀬 勝俊¹⁾, 片山 昇²⁾, 片山誠二郎²⁾¹⁾東京大学医学部肝胆脾・人工臓器移植外科, ²⁾片山耳鼻咽喉科

これまでわが国最初の西洋の解剖学書の翻訳本は、1774年（安永3年）に杉田玄白らによって訳出、出版された『解体新書』であるとされてきた。杉田玄白は、著書『蘭学事始』において、「はじめて唱ふる時にあたりては、なかなか後のそしりを恐るるやうなる碌々たる了簡にて企事は出来ぬものなり」、同じく『和蘭医事問答』において、「一番槍を入候には、槍玉に上り候覚悟に無之候得者相成間敷候。併し一人なりとも槍付け候者、本望の至りに御座候」と、自分の訳本が最初であることを強調した。しかし、その約100年前に、長崎のオランダ通詞（通訳）本木良意（1628-1697）が翻訳した『阿蘭陀経路筋脈臟腑図解』を最初とする指摘も多く、公正を期する必要があると考えられる。

『阿蘭陀経路筋脈臟腑図解』は、ドイツのヨハン・レメリンが著した解剖書を、出島のオランダ商館に抱えられていたテン・ライネというオランダ人医師に指導を受けて、本木良意が翻訳した解剖図譜であり、現在もなお少数が残されている。その一つは埼玉県秩父市の片山耳鼻咽喉科医院で所蔵されており、目次、解剖学的名称の一覧を記した内容目録と解剖図譜から成っている。図譜は、体表面から裏面までの骨格、筋肉の図があり、局部については、それぞれ数枚の下層の絵図が貼られており、めくって見ることができるようになっている。各臓器の縦断または横断図、大動脈から腸管や腎臓へ分岐する血管の平面図、食道から肛門までの消化管の連続図などがそれに続く。内容目録の方は、一枚目に目次が打っており、「頭頂」「額」「頸」「耳」「頤」「上唇」といった順で人体を網羅してある。最後の頁には、「本書通詞本本庄大夫差上之 天和二年四月中旬」とあり、本木良意の印鑑が押されている。天和二年（1682年）は「解体新書」が出版された年の92年前である。

片山家は、杉田玄白とほぼ同世代と考えられる片山友之丞安昇まで、秩父の地で六代医師を続けた医家である。六代の祖である片山左衛門正頼は、荒川上流の贄川村（現荒川村）の生まれで、村医を師として医術を学び、片山玄通と号して1643年（寛永20年）に死去するまで贄川村で医療を行った。二代目の片山元五郎正貞は大宮郷（現秩父市）へ出て開業し、以後、三代正重、四代古重玄友、五代正芳玄通、六代片山友之丞安昇と続く。『阿蘭陀経路筋脈臟腑図解』は、天和年間の初め頃に長崎で写本としてごく少数作られたもので、江戸では入手できなかったと考えられる。当時、医師が自らの医術の向上のため、長崎や京都に留学して勉強することはしばしば見られたことであり、片山家の代々の医師のいずれかが長崎へ出向いた際に購入したという状況が考えやすい。たとえば、大宮郷で開業した二代片山正貞が、青雲の志を持って長崎へ勉強に行き、その際筆写されたもののうちの一冊だったこの書を購入して秩父へ持ち帰ったとすれば、時期的にも一致すると思われる。

1766年（明和三年）、杉田玄白は、前野良沢と二人で、江戸の長崎屋に来ていた高名なオランダ通詞の西善三郎に会い、オランダ語修得の希望を述べたが、西善三郎はオランダ語学習の困難さを二人に論じたという。それを聞いた良沢は、ますますオランダ語習得への闘志を燃やし、長崎へ100日間出かけて勉強した。一方の玄白は、自分はいずれ早々に断念するだろうと思い、学習を諦めたといわれる。このときの経験が背景にあり、さらに西洋の解剖学所翻訳の一番槍を自負したためか、玄白は『蘭学事始』で言及しているように、通詞の仕事について感情的に否定したい気持ちがあったように考えられる。「医師が翻訳した」と付ければ『解体新書』が一番槍かもしれないが、「西洋の解剖学書の翻訳本」としては『阿蘭陀経路筋脈臟腑図解』が最初であるのが事実であり、そのように記載することが正当と考えられる。